

千葉市空襲と戦争を語る会隔月発行2012年3月1日創刊

代表者白井進、編集者伊藤章夫・関康治

## 千葉市空襲と戦争を語る会

事務局〒260-0844千葉市中央区千葉寺町149-2伊藤章夫

事務局の電話08053053739 akioito@w3.dion.ne.jp

代表の電話09093061583 fyqjc681@ybb.ne.jp

<http://itou-seki.la.coccan.jp/>

編集者と題名・ロゴマークを募集中です。

## 千葉市空襲と戦争を語る会5月例会 みなさん、交流しましょう

2012年5月24日（木）14時から千葉市中央区さぼーる11階で5月例会を開催します。大勢の方の参加を希望します。7・7千葉空襲の集いや平和の為の戦争展に参加して下さい。語りや遺品、歴史、資料等を展示してください。その準備をします。参加者の交流をします。

## NHKテレビから取材の依頼

5月11日、午後東京のNHK特報記者の高野さんから取材依頼の連絡がありました。千葉市空襲と戦争を語る会並びにちば・戦争体験を伝える会の市民運動の取り組みに関心があるようです。取材5月13日午後4時、白井代表の自宅で行われます。語る会には、空襲犠牲者の調査を、伝える会には、紙芝居活動を取材される予定です。

## 千葉市空襲と戦争を語る会4月例会

2012年4月19日（木）14時-17時、久しぶりの例会でした。2011年4月14日以来の1年ぶりでした。千葉さん、釘拔さん、大橋さん、関さん、古家さん、渋谷さん、尾本さん、堤さん、中村さん、岡崎さん、市川さん、安達さん、河合さん、白井さん、伊藤15人参加、新入参加者は5人！渋谷さんから御菓子の差し入れをいただく。釘拔さんは、高齢者の話を聞く活動をされていますが、とても若い女性です。河合節子さん自作紙芝居を上演しました。上映はさぼーる所有のプロジェクターをお借りしました。パソコンは関さんが持ち込んでくれました。関さんは千葉空襲と戦争を語る会の建設中のホームページを見せてくれました。

## 千葉市空襲と戦争の記録100人証言

「千葉市大空襲とアジア・太平洋戦争の記録100人証言」は1800部を普及出来ました。100人証言は生きた教科書です。あなたが購入して、若者にも勧めてください。地域を平和の力に変えるために3000部普及を目指します。お送ります。

## 東京大空襲訴訟控訴審判決 「不当判決」怒る原告

河合節子さん

4月25日東京大空襲訴訟の東京高等裁判所の判決ができました。1審と同様原告の訴えを棄却しました。私は原告の一人として法廷にいました。開廷して小さな声で30秒くらい棄却の主文を読上げたのですがすぐ閉廷でした。5月7日最高裁に上告しました。79人の大集団です。

私は5歳の時、35歳の母親（千葉寺出身）と3歳と2歳の弟を昭和20年3月10日の東京大空襲で殺され、父親は大やけどを負いました。1夜にして10万人が殺され、100万人が家を失いました。国内だけでも50万人とも60万人ともいわれる民間人が殺されたのですが、国として調査されていないので死者の数さえも不明です。

私達の訴訟は民間人戦争被害者の調査、追悼、謝罪と補償を求めるものです。今までの空襲訴訟は受忍しなければならぬとして退けられてきました。一審判決は被害が甚大であったこと、政府に道義的責任があったことは認めただけですが、補償については国会の裁量の範囲であるとしてしました。そして、「受忍しなければならない」とは言いませんでした。しかし高裁判決は[受忍]の言葉こそ使いませんでしたが前例を引用して、行間に受忍をにじませています。一審より後退した不当判決です。

受忍論の根拠になっているものは、戦時中に海外で没収された資産に対する補償を求めた訴訟に対して、1968年最高裁が下した[国の存亡にかかわる非常事態にあつては等しく受忍しなければならない]という判決です。この財産権の主張を退けた判例がその後の生命、身体の賠償請求にも適用されてきました。

有事法制が成立し、憲法改悪の流れが強まり、「戦後レジームの終了」などと発言する首相があらわれました。もし戦争をしない国を確信できるなら、私はこの訴訟に加わらなかつたかもしれません。自分の肉親の犠牲が平和の礎になっているのなら、あなたたちの死が犬死ではなかつたとあの世に行った時自分の家族に報告できるのなら、静かな老境の日々を送っていたでしょう。

この国は自国民の戦争被害を調査検証する事もなく曖昧にし、戦争協力者には恩賞を与え、最も弱いものを見殺しにしました。今もし、非常事態が起こればこの「受忍論」が在る限り多くの人が見捨てられるのです。

国の政策の誤りによって引き起こされた被害が国によって補償されるのは当たり前のことだと思います。そして今、国のエネルギー政策の失敗によって起きた原発事故の責任を曖昧にしたままでは、解決への道は闇の中です。

（この日、東京高裁への判決傍聴と台東区民会館報告会には、河合節子さん、古家幾久江さん、関康治さん、伊藤が参加しました。）

## 空襲被害者等援護法請願署名

中間集計（2012.5.12現在）

国民救援会10筆、千葉労連132筆、千葉民医連136筆、千葉民医連第2陣43筆、高教組23筆、千葉県職労210筆、個人

扱い松本さん5筆、門間さん5筆、藤代さん2筆、浅利勝美さん25筆、新宮さん5筆、千葉さん43筆、渋谷さん2筆、近藤さん5筆、田中武利さん5筆合計59筆と事務局独自回収340筆、合計992筆が集約されています。皆様もご協力お願いします。数をお知らせください。

## 日暮淑さんの千葉空襲の手記 (連載上)

(4月例会に出席された渋谷ヨシさんの縁でを寄せてくださった日暮淑さん(旧千葉女子師範卒業生)の千葉空襲の手記を掲載します。)

私達の人生の前半は、戦争の連続であった。昭和十二年、日支事変が始まり、参戦の教育を受け、『欲しがりません、勝つまでは。』を合言葉に戦争に参加していた。

昭和十九年に千葉師範学校女子部に入學したが、学舎という言葉には程遠く食糧増産の為に働くことが多かった。稲毛や若松農場で甘藷や野菜作りに励んだ。寄宿舎での食事は粗末なものである。噛んでも、噛んでも口の中にひろがってしまう麦飯、芋の葉や南瓜の葉柄を炒めて食べたこともあった。さつま芋などは御ちそうである。

農村では、増産に継ぐ増産が行なわれていたが、若者は勿論、中年男子も赤紙によって戦場へ征き、銃後は女と子供と老人だけで農業が守られていたのである。女でも牛馬を使い農作業に励んでいた。すべてが人力による作業である。夜は、遅くまで薫仕事等に励んで頑張っていた。開墾も各地で行なわれていた。豊住に十日川というのがあるが、戦争中に十日間で川を掘り、長沼を干拓して美田を造ったのである。

当時、農村では共同炊事が行われていた。個々の家庭では食事を作る手間を農作業に向け、不足しがちな食糧を大切にするためにも、五、六軒分をまとめて作るのである。私達は、海上郡の方へ共同炊事の手伝いに行った。大きな農家に宿を借りての作業である。大きな平釜で一斗五升位の御飯を炊くのである。前の晩に仕込んで置いてかまどに火を燃すのだが、薪に燃えつくまでが大変であった。朝、四時半に起床して御飯を炊き、人数に応じて分け、取りに来てくれるのを待つのである。お昼はおにぎりにして野良に運んでもらった事もあった。御飯が焦げてしまったりガンダになったり、その度に農家のお年寄りに助けていただいた事が忘れられない。その時失敗した焦げ御飯のおいしかった事も……。

女学校に入學した時は、それでもセーラー服であった。憧れの服を着ることが出来たのも束の間、二年になる頃には、セーラーのあの四角い襟はもったいない、海軍さんの軍服にするのだと襟をはずして供出したのである。そのあとは白い布で丸襟をつけた。スカートははけず、母の着物をほどいてモンペを作り、緋や縞のモンペで登校した。女学生の服装に似つかないものであるが、戦争中ということで誰も不平は言わなかった。だんだんと物資がなくなり、母親の帯を解いて帯芯を手拭いの代りに使ったり、足袋等も自分で作ったりしたのである。

昭和十九年の後半頃から、そちこちが空襲を受けるよう

になった。レーテ島、サイパン、グアムの玉砕、撤退につぐ撤退で本土決戦が叫ばれるようになった。遂に東京への空襲が毎晩のように続けられる。千葉市上空をB29の銀翼が通過して行く。燈下管制のもとで電燈の光を覆っておいた。外に出て見ると敵機をサーチライトが照らしている。高射砲で迎え撃つのであるが、敵機は高射砲の上を飛行している。高射砲の弾丸は届かない。千葉から東京の空を見ては悔しい思いをした。東京にお住まいのT子先生は宿直の夜、空襲警報(サイレン)が鳴ると『生徒さん、空襲ですよ。』と、寄宿舎の長い廊下を防空壕に向かって走って行かれるのである。『T子先生、また壕に入った。』と笑って見送っていた私達であったが、自分自身が空襲に会ったとたん、地獄のような悲惨さに度肝を抜かれてしまい、T子先生のように死への恐怖におののき、空襲の度に防空壕に走った。

四月十三日、たまたま帰省して家に居た時、板橋方面が空襲された。B29の一機が火だるまになって豊住方面に飛行してきた。夜だったので、管制下で灯を消していたのに、昼よりももっと強烈な明るさで、誰もが我が家に落ちてくると錯覚する位のスピードで迫って来たのである。その途中、北辺田へエンジンの一つが落ちて、その飛行機は急に角度を変えて矢口(印旛郡栄町矢口)の水田に突きささったので、人家への被害は無かった。皆ホッとした。この辺は田舎なので空襲の被害はないものと信じていたのに……。命拾いをした。

それより前、二月十一日雪の降る寒い一日であった。私達は、学徒動員で師範の寄宿舎から蘇我の日立工場まで練習機の部品を作りに行っていた。その日は朝から艦載機の襲来で折角工場まで行ったのに、大願寺のある山の方へ避難しなければならなかった。防空頭巾をかぶって馴れない道を、どう走ったのか今では思い起こせない。でも機銃掃射をくぐり抜け皆何とか無事だったことは嬉しかった。夕方、漸く艦載機が去って寄宿舎にたどり着いたみんなは、くたくたになっていた。

忘れる事のできない運命の日。昭和二十年六月十日。当時女子部は学校工場となっていた。日立工場は、空襲の対象であるので空襲から工作機械を守るために学校に移して居た。昼夜を分たず三交代で飛行機の部品造りに懸命の努力をしていた。赤い練習機のエンジンの部品造りである。一ミリメートルの百分の一の誤差も許されない厳しい作業である。その時、オシャカという言葉を知った。私は荒削りの部分で旋盤を動かしていた。油の中での作業で鉄屑が手にささる。取りきれぬ物ではなかった。

朝、八時十五分、深夜作業が終わり、遅い朝食を済ませて床に着く者や洗濯をする者、まだ食堂に居た人もある。その時、空襲警報がいきなり鳴り響き『房総半島を北上しつつあり。』とラジオの放送が告げると同時に、B29が頭上に飛来していた。(次号に続く)

## 編集後記

隔月に発行するのはやはり忙しいです。寄稿期待您的。NHKの取材を受けることになって、ようやく完成しました。